



University of the Ryukyus Library Bulletin. Vol. 24 No.2 June 28 1991.

増築問題を考える

阿部雅機

1 はじめに

あらゆる種類の図書館に不可欠な幾つかの要素がある。

第1に多様な図書館資料。第2にそれらの資料を利用する利用者の存在。第3に資料と利用者を結び、各種のサービスを提供（あるいはこのための基礎的な業務に従事）する図書館職員の存在。そして第4に資料を收容し、それぞれの図書館に課せられた諸機能を発揮するための施設（建築物）がそれである。

それでは大学図書館の諸機能とはどのようなものであろうか。

図書館は大学内に設置された施設であり、大学の大きな使命である教育や研究を補完す

る立場から、まずは学習活動を支援するための学習図書館機能や、研究活動を支援するための研究図書館機能がある。

また、全学的な共有財産として永年収集してきた図書館資料を適切に管理するためには、保存図書館としての機能が重要である。

さらに、本学のような総合大学においては、附属図書館本館、分館、学科図書室を包含する全学的な図書館システムとしての、総合図書館的機能が求められる。

これらに加えて、利用者個人の趣味や教養を充足し、くつろぎの空間を提供するという文化的な側面もおろそかにはできない。

近年、図書館は大学の構成員を利用の対象

増築問題を考える	1	系の横顔 学術情報係	12
<お知らせ>	7	教官著作図書寄贈案内	13
沖縄関係資料の目録検索システム開発について	8	図書館事情	15
資料紹介：「Du ju monde」(2)	10	医学部分館コーナー	16

とするだけでなく、社会に開かれた大学図書館として、地域における生涯学習を支援する場としての機能も求められている。

このように、大学図書館が果たすべき役割は、実に多様である。

図書館の施設は単なる「容器」ではなく、各館がどのような図書館活動を展開するかという基本理念を、最もよく表現するものである。そしてそれは、時代の流れにも合わせて対応できるよう、計画されるべきであることはいままでもない。

さて、本学が旧首里キャンパスから現在地に移転し、本館が建設されてから10年を経過した。この間の著しい変化により、現在図書館では、資料の管理面を中心に様々な問題が生じている。

本稿では、現施設の実態と増築問題への対

応等に関する基本的な考え方について、述べることとしたい。

2 増築問題の背景

(1) 量的な変化

本学は米国軍政府管理下のもとに開学（昭和25年5月）し、その後琉球列島米国民政府布令制定（昭和26年1月）、琉球政府立大学（昭和41年7月）、沖縄の本土復帰に伴う国立大学としての移管（昭和47年5月）、現キャンパスへの移転（昭和54年3月開始）等を経て、今日に至っている。

この間図書館も、建物、組織、蔵書、予算、職員等について、大きな変化があった。

ここでは次表を参考に、附属図書館本館が現在地に新設・開館した、昭和56年当時と比較してどのように変化したか考えてみたい。

表－1 最近10年間の増加状況

年度	蔵書数	雑誌受入数	資料購入費*	書架棚板数	利用対象者数*	入館者数	館外貸出冊数	図書館職員数*
昭和56年度	381,793冊	2,415種	153,488千円	17,826枚	6,749人	注1 186,135人	注1 51,051冊	注2 30(4)人
平成2年度	613,814	2,543	220,716	20,307	9,244	289,722	77,837	注2 31(6)
増減%	+60.8%	+5.3%	+43.8%	+13.9%	+37.0%	+55.7%	+52.5%	+3.3%

* 全学（分館）を含む数値

注1 移転のため7、8月は休館

注2 ()内は非常勤職員で外数

a 蔵書数

初めに蔵書について見てみよう。本学は創立当初から一貫して、中央図書館制度を推進してきた。

その内容は、大学図書館の近代的な運営と、図書館資料の集中化・共同利用である。

周知のとおり沖縄は、先の第2次世界大戦によって焦土と化し、戦前からの貴重な資料も灰燼に帰した。

図書館発足時の蔵書は約3万冊であったが、これらはほとんどが在米の沖縄出身者及び米軍からの寄贈によるものである。

前述の中央図書館制度の採用も、限りある資料を最も効果的に利用するための方策であり、この基本方針は今日まで継承されている。

図書館の蔵書が飛躍的に増加した時期が何回かあるが、その一つは昭和47年の国立大学移管時である。

文部省から本土との格差是正のための特別配分予算を年次計画で受け、これによって学術雑誌バックナンバー、教育・研究上の基本図書、参考図書、指定図書、占領統治関係を含む沖縄関係資料を鋭意整備してきた。また、国立国会図書館や他の大学図書館からも、大量の資料を譲り受けた。

もう一つは昭和60年以降の大学院設置及び学部の学科増に対応する資料の伸びである。

いずれにしても、10年間の蔵書数の伸びが全体の60%以上というのは、全国的に見ても大変な急増ぶりである。

現在約10万冊が研究図書として長期貸出されており、残りの51万冊余が本館に収容されている。千原キャンパスの蔵書のうち84%弱が本館の建物内に収容されていることになる。

そして今後も、本館では毎年最低1万8千冊以上の図書が、確実に増加し続けることが予想される。

b 雑誌受入数

図書館では共通性の高い学術雑誌を、共同

利用雑誌として共通経費で購入しているが、この5年間に26種を購入中止とした。価格の高騰や利用度からの見直しがその理由である。

これらの状況にも関わらず、開館当時との比較では、本館のある千原キャンパス全体で、128種増加している。

本学では、研究費による購入雑誌をも含めて共同利用体制が行き渡っているため、128種のユニークタイトルが純増したと考えてよい。

雑誌については、製本前は新着雑誌架が、また、製本後はバックナンバー用の書架が必要であり、二重にスペースを使うことになる。

そして、共同利用の程度が高ければ高いほど、図書館が急速に狭隘化するというジレンマがある。

c 資料購入費

資料購入費の10年間の伸びは6,700万円余である。文部省から図書館への配分額も、学内校費等の振替額も、増加率はさほど高くない。

差額の大部分は昭和61年度から学部及び大学院学生用図書の整備・充実のために学内配分を受けている、学生当積算校費の20%相当額にあたる。

この経費によって、本学の蔵書は飛躍的に増加し、同規模の国立大学の平均蔵書数にかなり近づくことができた。

d 書架棚板数

書架棚板数の増加は、収容能力の増加を意味する。

10年間に2,481枚の増加であるが、棚板1枚に収容できる冊数を30冊として計算すると、7万4千冊余分に相当する。

本館の場合、受入図書数から研究室への貸出分を差し引いても、毎年1万8千冊以上が図書館に残り書架に配架されるので、開館当初の収容スペースはすべて使いはたし、さら

に4年間の受入分に相当する書架を臨時的に増設したことになる。

実際にはこれらの書架は、書庫内の壁際、閲覧室の通路部分、研究個室内、廊下等にまで設置されている。

閲覧室内に増設分した書架は、各スパンの通路にS字状に連なり、資料の配列がわかりにくい、風通しが悪い、部屋全体が一望できず管理上不都合である、などの障害が生じている。

さらに、これまではなんとか閲覧座席を減らさずに書架を設置してきたが、今年度からは座席を減らして書架を組まざるをえない状況となっている。

一方、書庫内では、床に敷いた棚板の上に製本雑誌を置いたり、場合によってはダンボール箱に詰めたまま積み重ねているなど、利用上好ましからざる状況が続いている。

e 利用対象者数

これは全学的な数値で、本館のある千原キャンパスと、医学部分館のある上原キャンパスの合計である。

ここ5年間について見ると、教職員数が1.2%しか増えていないのに対して、学生数は18.3%も増加している。

f 入館者数及び館外貸出冊数

入館者数も館外貸出冊数も、昭和56年度に比較すると、双方とも50%以上の伸びである。

ただし、注1にあるように、この年は移転及び開館準備作業のために2カ月間休館しているため、単純には比較できない。

そこで前年の昭和55年と比較してみると、入館者数の伸びはわずか0.6%であるが、館外貸出冊数については43.5%も伸びている。

本館の場合1日当りの平均入館者数は、平成2年度の場合1,000名弱で、同規模の大学図書館では極めて高い数値である。

g 職員数

職員数はあくまでも参考までに記したものである。定員内職員は10年前より1名増えているが、平成3年4月の時点では逆に1名の減となっている。定員削減によるものである。

幸いにも、本学短期大学の学生を週31.5時間職員として採用し、なんとか運営している。

図書館資料や利用状況が飛躍的に増加しているのに対して、職員数の伸びは今後も多くを期待することができない。

新着図書や新たに受入れた製本雑誌を、書架に配架する際の職員の苦労は、並大抵ではない。わずかなスペースを作るためにも、大量の資料を絶えず移動し続けなければならない。大変な労力である。

(2) 質的な変化

a 業務電算化

この10年間に、質的な面でも大きな変化があった。その一つは電算機の導入である。

図書館では、昭和57年以降学内の情報処理センターのホストマシンを共用して、図書館業務の電算化を進めてきた。この間、昭和61年1月には学術情報センターと接続している。

平成2年6月からは、OPAC (Online Public Access Catalogue) システムの完成により、図書館の目録情報を学内からオンラインで検索することが可能になった。

そして、本学は平成3年2月から学術情報センターのノード校となり、今年度末には図書館に専用機が導入されることが決定している。

b 沖縄関係資料の整備

沖縄関係資料の整備については、本学の創設時以来の重要施策であるが、運営委員会の下に沖縄研究資料調査収集専門委員会を設置して、基本的な方針を検討するとともに、文

部省からの特別配分によって、整備を図ってきた。

これらの資料の一部は開架書架に配置され、貸出の対象となっているが、大部分は仮設の貴重書庫や閉架書庫に配置されて、学内外の研究者に利用されている。

これまで冊子体の所蔵目録が4回刊行されているが、平成2年度には学内の特別経費の配分を受けてデータベース化され、パソコンによって検索することができるようになった。

このことについては、本号の中で、稿を改めて紹介したい。

c 国際関係資料の整備

次に国際関係資料について見ると、首里キャンパス時代の UNESCO や OECD 資料の収集と合わせて、昭和60年度からは EC 資料センターとして、また、昭和61年からは国連寄託図書館としての活動を行っている。

この他、東南アジア関係資料についても鋭意整備を進めており、現在ではこれらの国際関係資料は、当館の特色あるコレクションの一つとなっている。

d 新しいメディアの登場

本館ではこれまでも視聴覚資料の整備には力を注いできたが、館内施設としての視聴覚室やLLが、利用者にとって必ずしも便利な状況にあるとはいえなかった。

平成2年からは、VTRやカセットテープについても館外貸出を行うようにした。また、館内でのオープン利用ができるようにVTR用のブースを設け、ウォークマンの館内貸出も行っている。

また、CD-ROMといった新しいメディアの導入にも、図書館として対応する必要性に迫られたため、現在本館では2階及び3階に機器と資料を備え、利用者自身が各種のCD-ROMを自由に検索できるようにしている。

e 市民への開放

本学の図書館は、首里キャンパス時代から一般市民に対しても開放してきた歴史を有している。

平成2年度にはそれまでの関係規程を改正し、内容も新たに学外者利用細則を定めている。すなわち、図書館資料の館内閲覧、コピー、レフェレンスといった従来のサービスに加えて、必要な条件を充たしている者に対しては、館外貸出をも行うことにした。

また、同年10月には本館内に放送大学沖縄ビデオ学習センターが設置されたことに伴って、同校の学生に対しても同様の措置を取ることにした。

駆け足で振り返ってみたが、我が琉大図書館の変貌の様子がおわかりいただけたであろうか。

このように学術情報流通体制の整備と国際化、新しい情報媒体の出現、市民への生涯教育の浸透といった状況を受けて、大学図書館のさらなる近代化は今後もスピードを落すことはないだろうと思われる。

本学でもこれまでは、なんとかスペースの使い方を工夫して乗り切ってきたが、これにも限界がある。

量的、質的な変化に今後も十分に対応するために、増築によって解決したいというのが最終的な結論である。

3 増築計画の実現に向けて

このようなことから、図書館では昭和60年以来、本館の増築計画を概算要求事項として申請してきた。

この間、昭和62年からは具体的な添付資料を作成し、また平成元年からは、本学の建築関係要求事項の中では、優先順位を第1位としていただくなどの進展があった。

最初の提出から、既に7年を経過しているが、残念ながら国家予算の厳しい状況もあっ

て、未だ実現には至っていない。しかし、ここ数年の感触では、増築の実現も間近いと思わせる雰囲気が生じてきた。

概算要求はあくまでも計画であり、従って今後も幾多の変更があるかもしれないが、この問題を学内の関係者の方々に知っていただく良い機会と考え、現時点でのプランについてごく簡単に紹介したい。

(1) 増築部分の計画

平成3年度の概算要求では、増築用スペースは現施設の西北部を予定している。

このスペースは、現施設が新築された時から、増築用として計画されているものである。

現在の閲覧室の西側は、いわゆる「首里の杜」であるが、ここは元々千原池に流れる深い谷を埋め立てたところで、工事には不向きなところである。もしも建築すれば、基礎工事に龐大な経費を要することから、専ら緑地として活用しているのが現状である。

次に北側を見ると、書庫の後は図書館の駐車場となっており、道路をへだてて生協の建物が建っている。

この地形的・地理的な制約によって、閲覧室の北側で書庫の西側にあたるわずかの空間を、増築用地の第一候補とせざるを得ない。

もちろん、現在の駐車場を予定地とする案もあるが、それだと書庫部分の増築に限った場合はよいが、閲覧室などの施設を含む計画の場合は、増築部分に行くのに、構造上一旦書庫の中を通らねばならないことになり、近代的な大学図書館の機能の点からは一考を要する。それだけでなく現在の書庫は、5層を貫く内階段がないために大変不便な状態である。

さて、増築部分の規格はRC4階建て、延面積は1,880㎡である。平成3年度計画による各階の使用計画の概要は、以下のとおりである。

- 1階 集密書庫：雑誌バックナンバーを収容
- 2階 雑誌閲覧室：新着雑誌約1,600種及びバックナンバー約3年分を収容
- 3階 国際資料室：国際資料及び洋書を収容
貴重書庫：貴重書及び準貴重書を収容
- 4階 機械室

既設部分との連絡通路は、書庫が1階及び2階で、また閲覧室部分が2階及び3階に設置される計画である。

(2) 既設部分の改修計画

図書館の機能を十分発揮するためには、増築部分と既存部分を合わせて検討すべきであることを、既に述べた。

館内の増築委員会では、その双方について約半年間をかけて検討しているが、ここでは既設部分の改修計画の概要を紹介したい。

* () 内は現在の名称

- 1階・新聞室（マイクロ資料室）
 - 現在館内の5カ所に分散している保存の必要な新聞を収容。
 - ・マイクロ室（マイクロリーダー室）
 - マイクロ機器及びマイクロ資料をすべて収容し、新たに個別空調を設置。
- 2階・目録コーナー（目録室）
 - OPAC用端末を最大10台まで設置。
 - ・多目的閲覧室（参考図書室）
 - 沖縄関係開架図書、指定図書、主要大学の紀要を収容。室内の一角をVTR、CD-ROM、LLのブースを設置してマルチメディアコーナーとする。
 - ・沖縄資料室（沖縄閉架書庫）
 - 現施設を2層に改築して書架を増設。もしくは第3層を改修し、全面使用。
 - 3階・参考図書室（雑誌閲覧室）
 - すべての参考図書を移設し、迅速なレファレンスサービスを提供。

なお、2階及び3階の開架閲覧室については、増築部分との連絡通路が各2カ所新設されることと、現状でも書架の臨時増設による弊害が生じていることから、閲覧席と書架を現在よりもゆったりと配置し直す計画である。

(3) 今後の取組み方について

以上附属図書館本館の増築計画について紹介してきた。ただ、これはあくまでも計画であり、今後の諸事情変化による計画の変更はあり得る。

例えば、増築の実現が遅れば遅れるほど、その間の図書館資料の受入増によって、対照的に増築部分の収容能力の余裕が小さくなるから、増築完成即満杯という事態をひき起こさないためにも、年々計画を見直す必要があるからである。場合によっては増築用地を根本的に考え直すことが求められよう。

もし現在地に隣接して適切なスペースが得られない際は、これまでの原則から離れて、一つの例として、例えば農学部、工学部の

キャンパス周辺に予定地を求めることも、今後の可能性としては存在する。

ただその時は、現在でも少なく困っている図書館職員をさらに分散配置することになり、組織上の問題も大きい。

このように増築問題で苦慮しているのは本学の図書館だけではなく、今や全国的な共通問題となっている。このため、国立大学図書館協議会においても、先年来特別委員会を設置して、具体的な試案を出すなどの対応を続けている。これらの状況については、改めて紹介することとしたい。

いずれにせよこの大きな課題に対しては、今後とも我が図書館の英知を結集して、粘り強く取り組む覚悟である。

最後に本学の教育や研究に大きな関りを持つ図書館の増築問題について、学内関係者の方々に今後とも関心をお寄せいただくと共に、合せて積極的にご協力下さるよう、この場を借りてお願いする次第である。

(あべ まさき：情報サービス課長)



長期貸出の開始と開館時間の短縮について

夏季休業に伴い、6月29日(土)から長期貸出を開始します。貸出冊数は学部及び短期大学学生が10冊まで、大学院学生が15冊まで、返却期限は9月10日(火)となっています。また、7月10日(木)から8月31日(土)の間は、開館時間が平日が17時まで、土曜日が12時30分となります。

DIALOG・JOIS・NACSIS—IR (代行検索の担当係が変ります)

6月から、参考調査係で行います。従来、学術情報係が担当してきましたが、この度、図書館専用機導入等で業務が複雑になるため、しばらくの間は、参考調査係で代行検索を行うことになりました。ご使用になる場合は、あらかじめご連絡下さい。(内線 2143)

沖縄関係資料の目録検索システムの開発について

図書館では、沖縄関係資料の整備に力を入れており、毎年多くの資料を受け入れています。これらの資料の有効利用を図るため、「沖縄関係資料目録」として、これまでに4冊の冊子体目録を発行してきました。この冊子体目録は、部数が少ないうえに利用要求が多いという状況がありました。情報を利用者に迅速かつ確に提供できないだろうかと考えている折、印刷された文書をコピーするのと同じ要領でOCRで読み取り、それを文字コードに置き換えて文書ファイル化することができる機械があることがわかりました。そこで、その機械を利用して冊子体目録をデータベース化して、端末から検索できないか検討したところ、市販のソフトを利用して目録検索システムを開発できる見通しもつき、平成2年度の教育研究学内特別経費の配分を受けて、沖縄関係資料目録の検索システムを作ることになりました。

まずはじめに、検索システムをどのようなコンピューターに搭載するかを話し合った結果、価格と維持費が安く、更には、誰でも気軽に利用でき、メンテナンスが比較的簡単なパーソナルコンピューターが適しているということになりました。その方針に基づいて、パーソナルコンピューターは、NECのPC-9801RXを購入し、外部装置に80MBのハードディスクを増設しました。また、システムの基本ソフトとして日本語MS-DOS、BASIC/98、QUICKSILVER、検作用ソフトとしてd-BASE III PLUS、データベース修正用ソフトとしてREC++を購入しました。こうして、ハードウェアやソフトウェアを揃えることと平行して、データベースの作成を始めました。データベースの原型となるファイルは、先に述べた印刷された文書を文書ファイル化できる機械を利用して、冊子体目録のものと形をくずさないように1ページず

つファイル化していきました。しかし、機械の限界と申しましょうか、印刷文字の読み取りや文字コードへの変換に間違いが目立ち、ファイルは、そのままでは利用できませんでした。そういうわけで、ファイルの文字の修正をデータパンチ業者に依頼することになりました。こうして、出来上がったファイルをデータベース化してハードディスクに搭載し、目録検索システムの開発を進めました。そして、今年の3月には、タイトル数約15000件の沖縄関係資料目録検索システムが完成しました。

この沖縄関係資料目録検索システムの成果として、次の点があげられます。まず一点目に、一般図書の目録情報は、OPAC（オンライン目録検索システム）で検索できますが、沖縄関係資料を網羅した情報については、これまで機械検索できませんでした。しかし、今回開発した目録検索システムは、これを可能にしたもので、このシステムを利用することにより迅速な資料検索が出来るようになりました。二点目に、パーソナルコンピュータを用いているため、操作が比較的簡単で、いつでも利用でき、どの場所にも設置でき、更に、システムのバックアップや障害時の復旧作業等が容易であるということです。

今後の課題として、検索中の待ち時間の短縮、検索項目の多様化、データベースの拡充などを検討中です。

本件に関する問い合わせ先：情報サービス課学術情報係（内線2146）

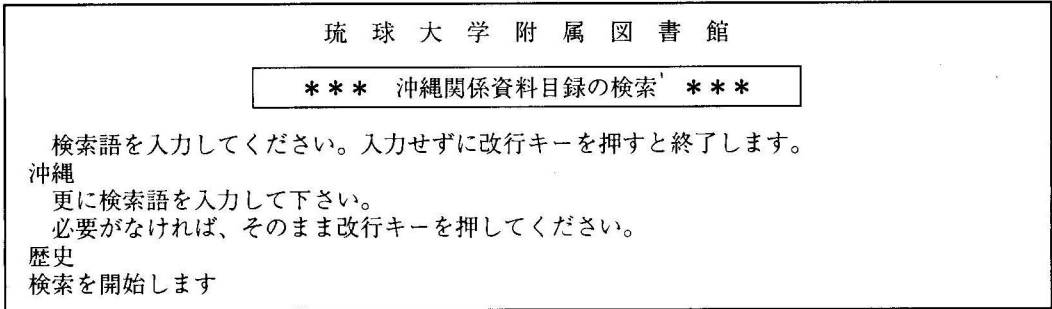
* 目録検索システム操作の手順 *

検索の手順を簡単に説明します。尚、この検索システムでは、書名と著者名のどちらからでも同時に検索できるようにしました。

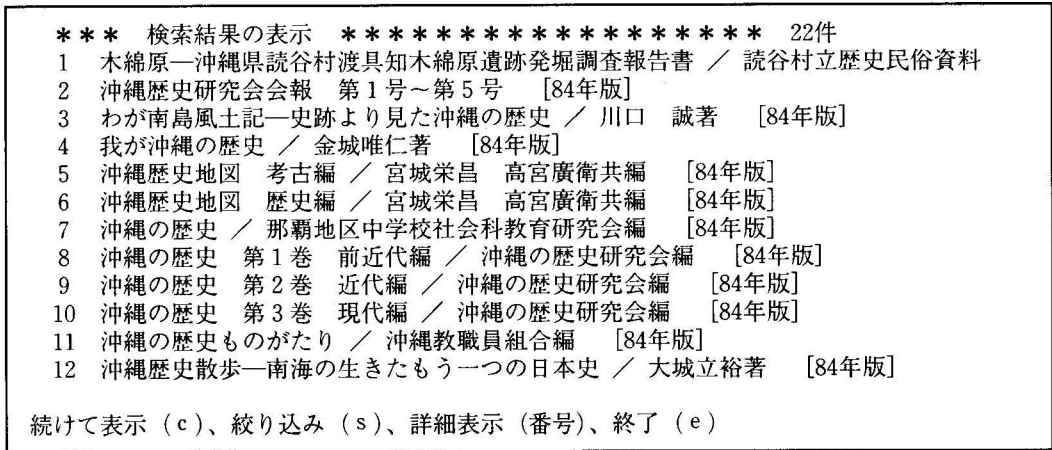
- ①スイッチを入れて検索システムを起動させる。
- ②検索語入力画面となる。

- ③検索語を入力する。 (図1)
- ④実行キーを押して検索を開始させる。
- ⑤検索の結果が件数で表示される。
- ⑥実行キーを押して簡略表示画面にする。 (図2)
- ⑦簡略表示番号を入力して詳細表示させる。 (図3)
- ⑧終了キーを何度か押すと最初の検索語入力画面に戻るので、そこで実行キーを押して検索システムを終了させる。

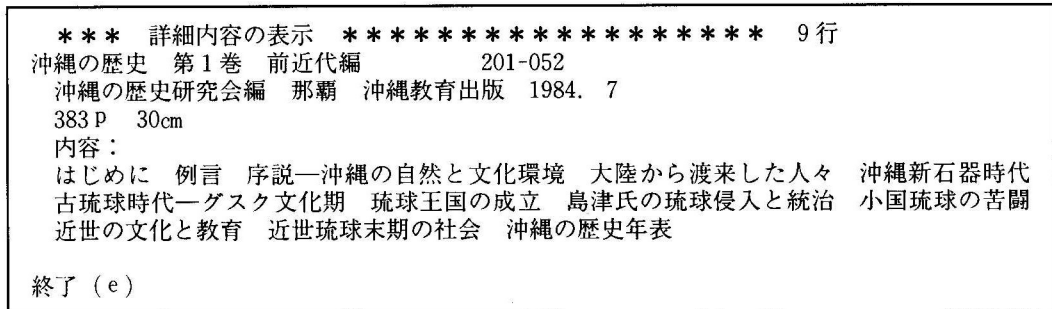
(図1) 検索語入力画面－“沖縄”と“歴史”で検索します



(図2) 簡略表示画面



(図3) 詳細表示画面－簡略表示画面の8番目の資料の詳細表示



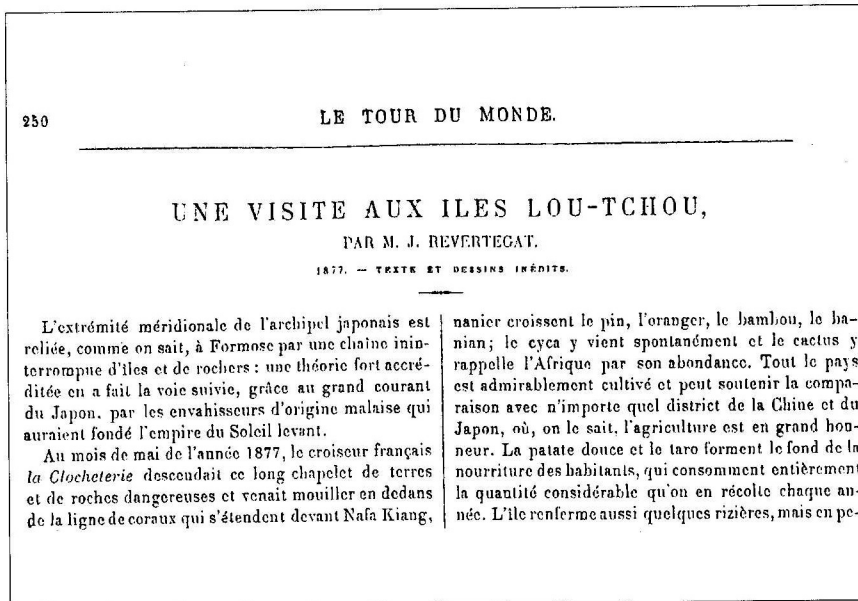
書籍紹介

Le Tour du Monde (『世界一周旅行』) シリーズと M.-J. Revertegat (ルヴェルトガ) :
 “Une Visite aux îles Lou-Tchou” (『琉球諸島紀行』1877年)〔2〕

森田 孟進

『ル・ツール・デュ・モンド』が当時(19世紀後半)どのような評価を受けていたのかは、ラルース (Pierre Larousse) 編の『19世紀大百科辞典』 (*Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle*) によって知ることができる (Monde の項)。同誌の最大の功績は英・独と比べて遅れていたフランスの地理学研究に新しい風を吹き込んだこと、フランス人の間に地理学愛好の気運を盛りあげたことであった、という。大衆は小説を読むかのご

とく同誌の旅行記を読んだ。旅行記のオリジナリティとバラエティ、ふんだんに収められている木版画の美しさ、これらのことが同誌へ前例のない大成功をもたらした。イラストとしての木版画をテキスト本文と同価値とする編集方針は編集長シャルトン (Charton) と版元アシュット (Hachette) 二人の卓見であった。さらに、ピビアン・ド・サン＝マルタン (Vivien de Saint-Martin) による地理学の専門家としての点検があるのも強みであ



ルヴェルトガ「琉球諸島紀行」(『ル・ツール・デュ・モンド』第1137号、1882年度第2巻に載った)。

る。同大百科辞典のこの項の執筆担当者が数えたところ、1873年末、すなわち創刊の年から数えて13年分全26巻についていえば、220編の旅行記、5,500葉の木版画、310葉の地図もしくは図表が収録されているという。

アフリカ、南アメリカ、アジア等に関する

重要な旅行記を執筆担当者はいねいに拾いあげているが、アジア関係では、当時西洋人にはまだ知られてなかったメコン河を上流へとさかのぼった探検記として有名なフランシス・ガルニエの「インドシナ探検記」

(Francis Garnier : "Voyage d'exploration

en Indo-Chine”)等とともに、エメ・アンベールの「ル・ジャポン」(Aimé Humbert : “Le Japon”)もあげられている。アンベールの「ル・ジャポン」は遠国日本についての正しい知識をはじめてフランス人に与えた旅行記である。「ル・ジャポン」は『ル・ツール・デュ・モンド』の1866年度第2巻から1869年度第2巻まで7回にわたって連載された長編の旅行記である。この旅行記は連載が終った翌年、*Le Japon illustré* の書名でアッシュト書店から刊行された。その日本語訳が高橋邦太郎訳『アンベール幕末日本図絵』(上・下巻、雄松堂書店、新異国叢書14・15、昭44年)である。『ル・ツール・デュ・モンド』に掲載されている日本の風物の数多い木版画は現在の私たちにとっても興味深いものであることをつけ加えておきたい(同誌の木版画の重要性についてはすでに述べたが、いずれも当時の一流のアーティストたち、たとえば、Bayard、Bonnefous、Gustave Doréらの手になるものである)。

『ル・ツール・デュ・モンド』第1巻から第59巻まで、それぞれの巻末に附されている目次を大急ぎで見たところ、日本関係記事としては、アンベールとルヴェルトガの旅行記以外に次の3編が目に入った(見落したもの

があるかも知れない)。

Marquis de Moges : “Voyage en Chine et au Japon (1857-1858)” (1860年度第1巻、pp. 161-176). [マルキ・ド・モージュ「中国と日本への旅」]。

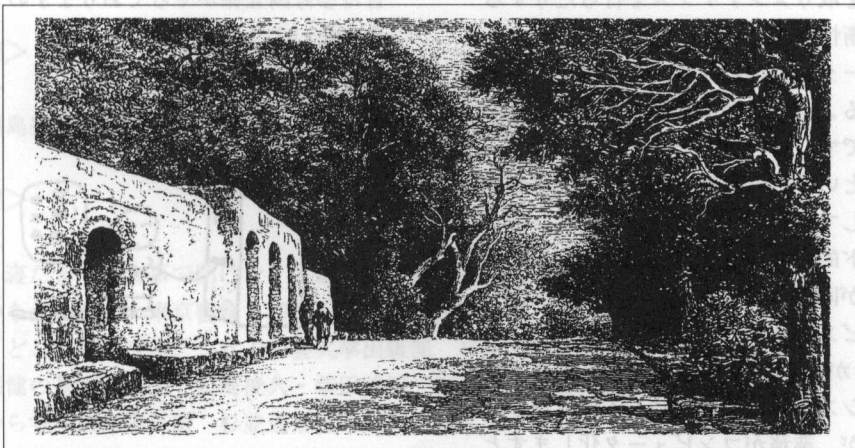
Eugene Collache : “Une Aventure au Japon (1868-1869)” (1874年度第2巻、pp. 49-64). [ユージョンヌ・コラシュ「日本でのアヴァンチュール」]。

Alfred Houette : “Une Ascension au Fusiyama” (1879年度第2巻、pp. 401-416) [アルフレッド・ウェット「富士登山」]。

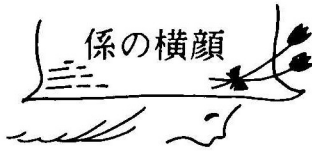
『ル・ツール・デュ・モンド』の創刊以来の編集長エドゥワール・シャルトン(Edouard Charton 1807-1890)は30年間同誌の編集長を務めた。シャルトンについては前掲のラルース『19世紀大百科辞典』をはじめ、いくつかの百科辞典、人名辞典にかなり詳しい記述が見られる。シャルトンが歿した1890年度の『ル・ツール・デュ・モンド』第1巻にはポール・ラフィット(Paul Laffitte)による追悼文が掲載されている(pp. 220-224、肖像一葉を含む)。この追悼文は、シャルトンの人となりを知るうえで役に立つ。

(つづく)

(もりた もうしん：教養部教授・仏文学)



崇元寺——琉球の道——G. Vuillier によるデッサン、M. -J. Revertegat の写真に依る。



学術情報係

大学図書館は、学術的な文献資料を収集し、教官、学生等へ提供することによって研究、教育、学習をサポートする機関であるわけですが、資料収集するだけではなく、情報洪水といわれている今の時代において、探したい資料を迅速に検索する手段の提供ということもまた大切な機能の一つとなっております。そのために、附属図書館では、学内でもいはやく業務にコンピュータを導入し、利用者が迅速に情報の入手ができるようなトータル・システムの構築に努めてきました。

現在電算化している業務には、目録作成、雑誌受入、閲覧などの業務部門を始め、利用者が図書館が所蔵する資料の検索を行うためのOPAC（オンライン目録検索システム）などがあります。このOPACは今年の6月にサービスを開始した利用者向けのシステムで、研究室の端末や図書館の専用端末から検索できることは、すでに御承知のことと思います。

こういう電算システムを企画したり、環境を作ったり、トラブルが起こった場合に、業者に連絡を取りメンテナンスを行ったりするのが、学術情報係というところです。つまり、コンピューターで行われている業務が、円滑に行われるように管理する係が学術情報係であるわけです。

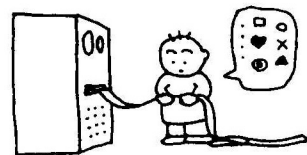
電算機というのは機械であるわけですが、日常操作していますと、オペレーションのミスやハード的な原因で障害を起こしたりします。それが回復しないと、業務がストップして、サービスが低下してしまいますので、早急の対処が要請されます。以前は、コンピュータシステムを全般的にみる係はなかったのですが、業務がコンピュータ化しますと、

それに関係するいろいろな業務が続出しますので、これを処理する係の設置が必要になったわけです。

このような業務の他にDIALOG、JOIS、NACSIS-IRといった情報検索の代行サービスがありましたが、現在この業務は参考調査係に移行しております。

ところで学術情報係からのお願いです。オンライン目録検索コーナーに設置されているOPAC端末を使いこなせる方は、最近では多くなっていますが、なかには正しい操作をしないで、迷宮に落ちこみ、一人悩んで動作不能状態から抜けられなくなり、端末の電源をブツンしてしまう方がたまたまいます。そういう大胆な行為をする前に、どうぞ遠慮なくカウンターに連絡してください。カウンターから当係に連絡があれば、係の者が対処致します。

また「学術情報係」という名前から推定して、当係に学術雑誌の所在調査についてのお問い合わせがたまにあります。こういう場合は参考調査係がやっておりますのでお間違えのないようにお願いします。



本学教官著作寄贈図書ご案内

1990. 11 ~ 1991. 4

注) 各資料末尾の記号は請求記号です。館内で探す際の手がかりとなります。

<法文学部>

宮城悦二郎

沖縄を考える：大田昌秀教授退官記念論文集 東江平之他編 アドバイザー 1990 K304-AG

岡本恵徳

「ヤポネシア論」の輪郭 —鳥尾敏雄のまなざし— 1990 沖縄タイムス社 K902-OK

地理学教室

南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究(Ⅲ) —アルゼンチン・ペルー— (昭和63年度文部省科学研究費海外学術調査) 琉球大学法文学部地理学教室 1990 K334.4-NA

佐喜真望

権力・知・日常：ヨーロッパ史の現場へ 長谷川博隆編 (名古屋大学西洋史論集 2) 名古屋大学出版会 1991 230.4-HA

津波高志

韓国伝承文化の研究 —沖縄との比較をめざして— (昭和63年度~平成2年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書) 沖縄県立芸術大学琉韓伝承文化調査団 1991 K382-OK

<教育学部>

心理学教室

教育心理学リーディングス：教育心理学の論理的背景と今後の展開 琉球大学心理学教室編 北大路書房 1991 371.4-RY

教育心理学リーディングス：名城嗣明教授退官記念誌 琉球大学心理学教室編 北大路書房 1991 371.4-RY

<理学部>

島袋敬一

琉球列島維管束植物集覧 ひるぎ社 1990 K472-SH

<医学部>

松崎俊久

ボケ・寝たきりが食事で防げた 主婦と生活社 1985 498.59-MA

老化のなぞを解く 東京書籍 1987 491.358-MA

寿命：どこまで伸びる？ 女子栄養大学出版部 1984 491.3-MA

老人保健の基本と展開 松崎俊久・柴田博編 医学書院 1984 493.18-MA

沖縄から学ぶ長寿の秘訣 杉並通信社 1989 498.38-MA

<工学部>

三輪信哉

鳥しょ水環境の展望：沖縄・ハワイのアプローチ 鳥しょ水環境研究グループ編 ひるぎ社
1990 K517-TO

上原方成

第三回沖縄土質工学研究発表会講演概要集 沖縄土質工学研究会 1990 K510.4-052-3

<農学部>

村山盛一

イネのF雑種の物質生産に関する研究（昭和57年度科学研究費補助金研究成果報告書） 1983
K616.2-MU

ハイブリッドライスの光合成能力に関する研究（昭和63年度・平成元年度文部省科学研究費研究
成果報告書） 1990 K616.2-MU

イネの一代雑種利用に関する基礎的研究（琉球大学農学部学術報告 第23号別刷 1976） K
616.2-MU

日本作物学会第190回講演会シンポジウム要旨 日本作物学会 1990 K616.2-NI

<教養部>

Eric Paul Shaffer

Rattle snake rider Longhand Press c1990 931-SH

Kindling : poems from two poets Longhand Press c1988 931-SH

山里純一

律令地方財政史の研究 吉川弘文館 1991 210.3-YA

<名誉教授>

兼島清

兼島清教授記念論文集(1957-1988)琉球大学理学部化学科分析化学講座 1988 K430.4-Ka54

兼島清先生退官記念誌 兼島清先生退官記念事業会 1988 K430.4-Ka54

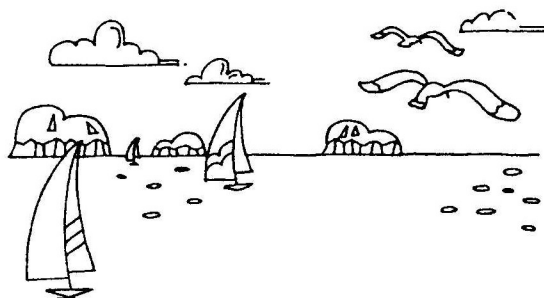


図 書 館 事 情

〔人事移動〕平成3年4月1日付

氏 名	現 職 (前 職)
及川三千男	事務部長 (京都大学庶務部国際交流課長)
仲西 盛秀	情報サービス課専門員 (同課閲覧係長)
松原 敏夫	♪ 閲覧係長 学術情報係長併任 (同課学術情報係長)
渡慶次安子	♪ 分館閲覧係長 (同課閲覧係)
潮平 浩俊	情報管理課受入係受入主任 (理学部・工学部用度主任)
内原 厚志	♪ 総務係 (医学部管理課用度第一係)
伊佐 牧子	情報サービス課閲覧係 (情報管理課受入係)
垣花るり子	♪ 参考調査係 (短期大学部会計係)
城田 由二	♪ 分館閲覧係 (情報管理課分館整理係)
=====	
松浦 正	筑波大学図書館部長 (事務部長)
新井 裕丈	辞職 (情報サービス課図書館専門員) 平成3年3月31日付
平 陽子	定年退職 (♪ 分館閲覧係長) 平成3年3月31日付
知念 勝	医学部管理課用度第二係主任 (情報管理課総務係)
比嘉 光治	理学部・工学部学務主任 (♪ 受入係受入主任)
伊佐 眞一	教養部学務係 (情報サービス課参考調査係)
新垣美津子	♪ 会計係 (♪ 分館閲覧係)

〔会議〕

◎図書館運営委員会

第189回 平成3年5月16日(木)

報告事項

- (1)平成2年度図書館統計について
- (2)図書館専用電算機種選定委員の委嘱について
- (3)第21回九州地区国立大学図書館協議会及び第42回九州地区大学図書館協議会総会について
- (4)その他

◎附属図書館専用電算機種選定委員会

第1回 平成3年5月21日(火)

協議事項

- (1)委員長の選出について
- (2)附属図書館電算化新システム仕様書(案)について
- (3)その他

〔講演会〕

◎沖縄県大学図書館協議会研修講演会

(平成2年度第4回)

日時 平成3年3月26日(火)

場所 附属図書館会議室

講師 学術情報センター事業部データベース課課長補佐 由良信道氏

演題 学術情報センターにおけるデータベースの開発と今後の展開について

◎平成3年度附属図書館職員研修

日時 平成3年5月22日(木)

場所 附属図書館会議室

①講師 及川三千男事務部長

演題 国際交流と大学図書館

②講師 阿部雅機情報サービス課長

演題 大学図書館と建築計画

医学部分館だより

◎CD-ROM資料の利用状況について

医学部分館では、4月10日からDIALOG社製のMedline CD-ROM(1984~1990年最新版)を導入し利用に供しています。開始後1年経過しましたが、この間の利用状況は以下のとおりです。(平成2年4月10日から平成3年3月31日)

職 員		院 生 医		院 生 保		学 生 医		学 生 保		合 計		1 日 平 均	
人	枚	人	枚	人	枚	人	枚	人	枚	人	枚	人	枚
744	5,119	340	2,350	116	761	335	2,117	39	250	1,574	10,597	6	37

利用者の反応は好評で、なかでも大学院生、研究生などからは特に喜ばれております。この間の要望として、利用者から短時間に検索をするためのCD自動入替装置CD-チェンジャーの導入、利用者の増大に対処するため予約制と利用時間の制限、機器の増設等がありました。それらに対応するため、平成2年11月にCD-チェンジャーを設置、平成3年3月に機器を1台増設(CD-チェンジャーを含む)、及び平成3年4月にMedline CD-ROM最新年+前年(1990~1991年最新版)を導入し改善をはかりました。今後の対応として、日本語版CD-ROMの導入希望がありますので医中誌CDの導入を検討しています。

◎オリエンテーション

- 平成3年4月8日(月) 11:30~12:00 新入生の図書館利用について
- 平成3年5月14日(火) 13:10~14:50 図書館利用及び文献検索について
対象 平成3年度入学医学科大学院生 10人
- 平成3年5月16日(木) 13:10~14:50 図書館利用及び文献検索について
対象 大学院保健学研究科生 10人
- 平成3年5月17日(金) 13:10~14:15 図書館利用及び文献検索について
対象 大学院保健学研究科生 9人
- 平成3年5月28日(火) 13:10~14:50 図書館利用及び文献検索について
対象 平成3年度入学医学科大学院生 10人

◎寄贈図書、雑誌

- 平成2年9月より平成3年5月までにご寄贈いただいた主な分を掲載します。(敬称略)
- 猪狩 淳(臨床病理学教授)
「シンプル病理学」1990 分類: Q Z 4 他18冊
- 石津 宏(精神衛生学教授)
琉球大学保健学研究科修士論文 「妊産婦の出産前後に於ける心理的様態に関する精神衛生学的研究」 他26冊

琉球大学附属図書館報 “びぶりお” 第24巻 第2号 [通巻第91号]
平成3年6月28日 発行
発行 琉球大学附属図書館 〒903-01 沖縄県中頭郡西原町字千原1番地
電話 (098) 895-2221 内線 (2143) びぶりお編集委員会